
プロジェクト報告

現代スペインにおける 日本文化の受容に関する考察

渡 邊 千 秋

今期のプロジェクトを申請するにあたって、私はスペインにおける日本文化の受容を主題にしたいと考えた。しかしながら、その後、「日本文化」が指し示す範囲の広さから、改めてより具体的な研究対象を定める必要に迫られた。かねてから日本の「マンガ¹⁾」がスペインにおけるスペイン語やカタルーニャ語を母語とする話者の日本語習得に役買っていることに強い関心を抱いていたため、その実態に接近できるような何らかの調査を試みようと考えた。

現在では、日本を代表する文化事象のひとつとしてマンガは確固たる地位を築いているように見える。武蔵野学院大学の佐々木隆は、「マンガは絵画と文章を組み合わせ、物語を表現する手法のひとつである」が「日本では複雑なストーリーの構成や、登場人物の心理描写の細かさなどの(マ)点で、独特の発展を遂げた。」と述べる²⁾。まさに、日本語と絵柄でストーリーを展開する日本のマンガは、独自の歴史と発展を誇る日本の文化資源であるとともに、日本を代表するポピュラー・カルチャーの端的な例であろう。

近年では、マンガは学術研究の対象としても承認されるようになった。たとえば、明治大学は、2009年10月以来「東京国際マンガ図書館(仮)」構想を発表し、また米沢嘉博記念図書館を開館するなど、マンガ資料の収集保管に尽力する³⁾。また、著作権が有効な資料が多数である分野であることに鑑み、保存のためのデジタル化を可能にする制度を求め、資料のデジタルアーカイブ化へむけた提言も行っている⁴⁾。

1) 本稿では便宜上、表現に日本語を用いた漫画を「マンガ」とし、その他の言語を用いて描かれた漫画を「コミック」と呼ぶことにする。

2) 佐々木隆『ポップカルチャー論』東京：多生堂、2016年、64頁。

3) 明治大学・東京国際マンガ図書館 <https://www.meiji.ac.jp/manga/> (最終閲覧日2025年8月22日)

4) 森川嘉一郎「マンガ・アニメ・ゲーム文化のすべてを収蔵するミュージアムを」福井健策・吉

このような日本の文化資源であるマンガが、スペイン人にも読まれるようになって久しい。Historieta, Tebeo, Viñeta など、スペイン語にはコミックを意味する単語が複数存在することからも類推できるが、日本マンガのブームが到来する以前から、スペインにはマンガという日本文化を受容する土壌があったといえる。スペイン生まれのコミックの一例を挙げておこう。1958年にスペイン人フランシスコ・イバニェス⁵⁾の手によって世に出た『モルタデーロとフィレモン』は、失敗を繰り返すスパイ2人組の行動を扱って大ヒットし、子どもから大人まで幅広い読者層を得て、現在でも人々に読み継がれている作品である⁶⁾。

日本のマンガに関しては、大友克洋『AKIRA』や鳥山明『ドラゴンボール』の1990年代初めのスペイン語翻訳版の出版が、スペインにおけるマンガ・ブームの火付け役となったとされる⁷⁾。ここで、マンガ人気を裏付ける傾向として、1995年以来、カタルーニャの州都バルセロナでは、マンガの展示会 (salón) が毎年開催されていることを指摘しておきたい⁸⁾。開催当初は小規模な集まりであったようであるが、その後の名称変更も経て、2024年に開催された「マンガ・バルセロナ」では、マンガはもちろん、ビデオゲームや音楽など、日本のポピュラー・カルチャーを主軸として、国内外からのゲスト・クリエイターが20名ほど参加した。のべ16万5000人の入場者を数え、272のブースが出店したという⁹⁾。

スペイン語を母語とする人々のうちのどれくらいが日本語を学ぶのか、正確なところは不明ではあるものの、マンガを用いた日本語学習の教科書が発刊され、現在まで版を重ねているのは事実である。たとえば大阪外国語大学で学んだマンガ翻訳家である M. ベルナベが記した教本『マンガで日本語』は、2002年の出版以降版を重ね続け、今では改訂を経て、『マンガで日本語完全版』として教本と練習帳をセットした形で販売が行わ

見俊也（監修）『アーカイブ立国宣言』東京：ポット出版、2014年、61頁。

5) フランシスコ・イバニェス（1936-2023年）は、後の世代の作家に大きな影響を与えたマエストロと評される、バルセロナ出身のクリエイターであった。

6) 紙媒体はもとより電子媒体でも出版され続ける。

7) Marc BERNABÉ y Oriol ESTRADA: *501 mangas que leer en español*. Barcelona: Norma Editorial, 2019, p.8. マンガのスペイン語版の出版はこれ以前から既に始まっていたとはいえ、鳥山明の『ドラゴンボール』がテレビアニメとしても翻訳・放映されたことが特に大きな影響を与えた、と考えられている。

8) 2019年までは「サロン・デ・マンガ」という名称であった。

9) 「バルセロナ・マンガ」<https://www.ficomic.com/es/manga-barcelona.cfm>（最終閲覧日2025年8月22日）

れる¹⁰⁾。またこの本はカタルーニャ語でも出版されている¹¹⁾。この背景には、人々のニーズが反映されていると思われる。日本語でのオリジナルのまま、マンガを味わいたいと考える人が一定数存在することが想定されるとともに、マンガが日本語の学習ツールとして大いに役立っていることが伺える。

M.ベルナベは、2025年2月に来日し、セルバンテス文化センター東京で、スペイン語・日本語の二言語を並行して使用しながら、「マンガを訳すというおしごと」というタイトルの講演を行った。当日のトークでは、日本語で描かれたマンガの世界観全体をスペイン語に翻訳するうえでの苦勞が語られた。マンガ翻訳をめぐる注意点の多くが、日本語を母語とする人間には想像がつかないものであり、指摘になるほどとうなずかざるを得ない、異文化理解の課題そのものであった。たとえば、マンガを読むときの読み手の目線であるが、あたりまえのように右から左に移ることができる日本語を知る者の目線と、意識しなければ左から右へ追ってしまうスペイン語話者の目線を考えながら翻訳することにともなう困難や、擬音語や擬態語、たとえばドカッ、ぱぱぱ、といったカタカナやひらがなで、また時に特別の字体で描かれる文字がもつ「雰囲気」をどう翻訳するか、といった、マンガをスペイン語に翻訳する上での技術に関する、核心的な案件も取り扱われた。プロフェッショナルの視点からみた、コマ割りや吹き出しのなかに含まれる暗黙の了解をどう翻訳し、異なる文化を生きる人々の間を取り持つのかということを考えさせられた¹²⁾。

スペインにおける日本語学習ブームの火付け役となった日本のマンガではあるが、実際には、やはりスペイン語へ翻訳されたバージョンで読まれるケースが圧倒的に多い。一般に流通しているスペイン語のマンガ単行本の大半は、一見したところ、日本で普及しているマンガ単行本のフォーマットである新書判と同じであるように見えた。しかし、マンガの日本語版とスペイン語版を実際に計測してみたところ、スペイン語版は新書版と比較すると縦が若干短めになっており、数グラムではあるが重い、という測定結果がでた¹³⁾。また、安価なバージョンが広く流通するスペインでも、一般的な版の数倍の価格帯で、日本でいうところの「愛蔵版 (edición coleccionista)」であるハードカバーでの編集版も存在しており、改めて、熱心なファンをもつ日本のマンガ作家・作品がある

10) Marc BERNABÉ: Japonés en viñetas integral, Barcelona: Norma Editorial, 2014.

11) Marc BERNABÉ: Japonés en vinyetes, Barcelona: Norma Editorial, 2006.

12) 当日のトークの様子は以下の URL を参照されよ。https://flic.kr/s/aHBqjC39td (最終閲覧日2025年8月22日)

13) 日本語版は縦17.6cm × 横11.3cm、144g。スペイン語版は縦17.0cm × 横11.6cm、220g。遠藤達也『スパイファミリーSPY × FAMILY』第1巻を用いて計測した。



【写真①】 愛蔵版として諫山創や手塚治虫の作品が並ぶ。

ことを目の当たりにした【写真①】¹⁴⁾。

もちろんマンガは、スペインでも、インターネット通販で購入できる。ただしそれと同時に、スペイン・マドリードの場合、実店舗での販売形態が促進されていることが、特筆すべきひとつの傾向であろうと考える。マドリードの実店舗においては、マンガは日本でよく見かける書店の1コーナー、もしくは1フロアに集められて販売される、といった形態ではなく、店舗全体がマンガに特化した形での専門店としてマンガを取り扱うのが通常となっているようである。

日本語を原語として用いるマンガのほかに、日本語以外の原語で描かれているマンガつまり「コミック」を扱う実店舗も多数ある。そしてこれら日本語以外の言語で描かれるコミックを扱う書店は、あくまでもその販売に特化した形で経営されている。他方で、すでに述べたように、日本語から翻訳されたマンガとその関連商品を扱う店舗も自分たちの専門分野に特化する戦略にでていることが明確であり、それぞれが自主的に「棲み分け」を行っているように思える。

実例として、マドリードの店舗を挙げておきたい。マドリード市内にはマンガを販売する実店舗が複数存在する。特に地下鉄サン・ベルナルド駅近くの一區画には、複数の店が軒を連ねる。そのなかでも、OTAKU CENTERの品ぞろえは群を抜いていた。いわゆる日本独自のマンガと、その主人公のフィギュアなどの関連商品を揃える店舗であり、多くのマンガファンが訪れる場となっている【写真②】。

14) 本稿で使用する全ての写真は本稿執筆者が撮影したものである。



【写真②】店内のようす



【写真③】ショーケースに並べられたフィギュア商品など

店員はさまざまなジャンルに及ぶマンガの知識豊富な人々である。マンガファンは、彼らとの会話を楽しみながらお目当ての商品を手に入れる。また、複数いる店員はもとより、そこに偶然居合わせた他の人々とも新刊マンガの話をしたり、自分が読んでいる最中のマンガの情報を交換し合うなどして、コミュニケーションをとりながら、商品を選んでいく様子が見てとれた。店内にはスペイン語に翻訳されたマンガ書籍はもちろん、日本語オリジナルのマンガもあった。Tシャツ、フィギュアといったグッズやカプセルトイ（「ガチャガチャ」）なども置かれていた【写真③】。

店舗は、マンガに惹かれ集う人々が創造する世界観を垣間見ることのできる開かれた空間であるといえよう。

日本と同様にスペインでも、毎月、マンガの新刊が続々と発売される。しかし、数量としてどのくらいなのか、正確なところはわからないという。このような現状を踏まえながら、スペインで展開するマンガの世界観にどのような方法でアプローチするのがよいか模索しつつ、今後の研究を進めたいと思う。